



Teacher Soma の

英語のルナシ

第2回

アルファベット考

アルファベットの文字

A B C D

さて皆さん、アルファベットから始めます。「え、アルファベットから？」なんて思わないで下さい。基本はここからです。現代英語のアルファベットはギリシャ語にさかのぼります。‘alphabet’という語は、知っている人も多いと思いますが、ギリシャ文字の α 「アルファ」(alpha)と β 「ベータ」(beta)をたしたものです。ギリシャ文字はラテン文字の基本にもなっていますので、結局、英語のアルファベットはそこに至るまでの過程を示すと、ギリシャ語→ラテン語→英語の順番になります。

例えば、アルファベットのCがあります。‘certain’と‘curtain’では、わずか一文字違いですが、語頭のCは、片や[s]音、片や[k]の発音で、音が違っています。おかしいと思わなかったですか。Cは、ローマ人がギリシャ語の Γ (gamma)「ガンマ」を丸めて作ったもので、ローマ人はこれに[k]の音価を与えました。ですので、ラテン語ではCは基本的に[k]音で、ラテン語のアルファベットのA→B→Cは[ā]→[bē]→[kā]と読みます。この影響で英語でもCは、基本は[k]の音です。ただし、ce-、ci-、cy-のスペルではCが[s]の音価を持ちます。これは後(10世紀以降)のフランス語の影響です。例えば、ceremony、circus、cycleなどです。ガンマの[g]の音(音価)については、ローマ人は、Cを少し変形してGという文字を作ったのです。ローマ人はこのようにギリシャ語のアルファベットを、形や発音の面でローマ風に変えたわけです。

もう一つ変えた例があります。ちょっと複雑なハナシです。Jの文字のことです。この文字は、ギリシャ語にはありませんでしたし、ラテン語にもはじめはなかった文字です。コピー機などがなかった大昔の時代には、写字生という人たちがいました。日本にもいたはずですが、もちろん中世ヨーロッパにもいました。これらの人は文書を書写したりする人たちでした。この写字生が、iの文字が判別しにくくなることがあったため、分かりやすくするために、iの先を少し曲げてjに写したのがこの文字の始まりとのことです。したがって、文字的には、i=jだったのです。このjがやがて半母音(youとかyearとかyoungなどの語頭のyの音で、発音記号は[j])をあらわす文字になりました。そして、この半母音のiは、フランス語では[ʒ]になり、これが英語では[dʒ]となっていくます。要するに、子音度が上がるわけです。例えばラテン語のiustusは、フランス語でjuste[ʒyst]、英語でjust[dʒʌst]になるというような変化です。

ハナシがちょっと複雑になります。例えば、誰でも知っている名前のJohnは、ギリシャ語ではIōannēs(Ἰωάννης)です。この名前は、もっとさかのぼれば古代ヘブライ語(イスラエルの言語)のYohannanです。したがって、この名前が、ヘブライ語からギリシャ語、ラテン語を通して英語に入る変化は、

Yohannan→Iōannēs→Jōhannēs→Johnの順です。まあ、Johnが一番発音しやすいのは間違いないです。そういうことなので、日本語では、「ヨハネ(例えば、福音書のヨハネ)」となったり、普通の名前の「ジョン」となったりしています。Ian、Ivan、Jon、Jonathan、Jack、Johnnieなどの名前はすべてJohn系列の名前です。

この語頭のY→I→Jの変化のもう一例をあげます。皆さん誰もが知っている「イエス(Jesus)」です。古代ヘブライ語では‘Yhōšūa’ (エホーシューア)で、“Yahweh is salvation.”「神は救いである」の意味です。当時はよく使われた名前だそうです。短縮が‘Yešūa’ (ヨシューア)です。ラテン語に入るとIēsūsです。したがって、Yhōšūa /Yešūa→Iēsūs→Jesusです。まあ、このように変わっていったということです。

ついでですが、高尾利数(1930~2018)著「キリスト教を知る事典(東京堂出版)1996年」によると、当時「イエス」はよくある名前です。キリストのことは「ナザレのイエス」といわなければ、分からなかったと書かれています。もう一つついでですが、「キリスト」という語は、ギリシャ語の‘Χριστός’ (Christos)からきています。この語は人名ではなく、「油を塗られた」の意味です。古来イスラエルでは、民族の存亡の危機のような重大な時に特別な能力を持った人を選び、その人の頭に聖なる油を注いで祝福したのです。梅田 修によると、この油は‘chrism’「聖油」と呼ばれ、オリーブオイルにバルサム(balsam)を混ぜたものであったそうです。

アングロ・サクソンとケルト

第一回のハナシで少し述べましたが、現代英語のおおもとになっているのは、北ドイツにいたゲルマン系の民族の言語です。現在のデンマークが位置するユトランド(Jutland)半島の北部や南部の付け根あたりにいた民族(Jute族、Frisian族、Angle族、Saxon族など)です。アングロ・サクソンという場合、AngelsとSaxonsの二つの民族の名前ですが、イギリスに侵入したのは、この二つの民族だけではなかったこととなります。民族によりイギリスに渡った場所が違います。例えば、サクソン族はブリテン島南部です。これらの民族が4世紀末から7世紀にかけて、イギリスの島々に渡ったと言われています。この民族移動の原因はよくわかりませんが、一説には、4~6世紀にかけて中央アジアからヨーロッパ中央部にかけて遊牧民系のフン族(Hun)が西に押し寄せたためというのがあります。

ローマ人やゲルマン系の諸民族が侵入するイギリスには、もちろん先住民がいました。皆さん聞いたことがある名前かもしれません。ケルト人(Celts)です。この民族は、紀元前2000年ころヨーロッパ大陸からイギリスに渡ったとされています。ケルト人がどんな民族であったかについては、何といても司馬遼太郎の文章がかみ砕いた文章で、その特徴をつかんでいます。「春灯雑記(朝日新聞社)1991年」に以下の記述があります。

『かれらローマ人はこの島に紀元前四十三年にやってきて以来、先住のケルト人を屈服させ支配してきた。

ケルト人については、さきにガリアのくだりてふれた。ガリ人とよばれ、その後ゴール人ともよばれた。ローマからみた野蛮人の一代表といった存在である。古代のケルト人は西ヨーロッパの代表的な古民族の一つであり、ふるくは西ヨーロッパ全円にひろがっていて、鉄器を早い段階で獲得し（前七五〇～前五〇〇年）、また装身具や武器などにずいぶん工夫をこらしたりもした。

ただし、かれらは習性として粟つぶをまいたように小単位で散在するのが常だったため大勢力をなさず、大国をつくらず、大文明もおこさなかった。いこじで組織的行動がとれず、このあたり、ジョン・フォードの映画に出てくるアイルランド系の主人公をおもえばいい。ジョン・フォード監督は意識してケルティッシュな性格をえがきつづけたのではないか。』

ブリテン島に移ったケルト人にたいする司馬さんの気持ちが出ている文章です。John Ford(1894—1973)は、アメリカの映画監督で、西部劇映画を作った名監督です。映画の主人公としては、一匹狼的な正義の味方を描いた人でした。Clint Eastwoodが演じたDirty Harry刑事もアイルランド系の主人公として描かれているはず。何となく、権威や集団が苦手（ゲルマン系はこれが得意）、孤高で意固地に生きている姿が、まさにアイルランド民族、すなわちケルトの血と一致するのです。司馬さんは、そのことを言っているのだと思います。ただ、現実に存在した民族はそんなカッコイイものではなかったかもしれません。

それにしても不思議な民族です。ケルト人は大文明をおこしたローマ人とは対照的に生きてきた民族です。ローマ人のような集団組織力学を持った民族とは圧倒的な軍事力の差があったでしょう。ケルト人はローマ人に蹴散らされ、Wales、Ireland、Scotlandに逃げて、その地での主勢力になっています。もちろん、Englandの地に残り、ローマ人と同化したケルト人も多くいたはず。しかし、これも時間の問題で、ローマがやがてイギリスから身を引き、その空き家を狙って入ってきた北ヨーロッパの低地にいたアングロ・サクソン人に侵略され支配されてしまいます。ケルト人は、このゲルマン系の民族に再度蹴散らされます。現在のEngland人の主流の白人の先祖は、このアングロ・サクソン人です。

「ケルト人 ヴァンセスラス・クルータ 鶴岡真弓訳（白水社）1991年」には、以下のような詳しい地理的な記述があります。

『ケルト人は勢力の絶頂期、ヨーロッパのきわめて広い範囲に占住した。西はイベリア半島からブリテン諸島までの大西洋沿岸、北はドイツからポーランドに広がる北部大平野の内側、東はカルパティア山脈。南はカタロニア丘陵、アペニン山脈北側、「鉄の門」手前のドナウ河流域の南縁から地中海沿岸地域に及ぶ範囲である。』

ということは、ケルト人は、東はルーマニア、南はイタリア北部のあたりまでいたこととなります。ギリシャ人は彼らをケルトイ(Κελτοί = Keltói)、ローマ人は「ケルタエ(Celtae)／ガリ(Gallic)」と呼んで記録しています（古くはBC 5世紀のヘカタイオスによる記録）。「ガリ」は、おそらくケルトの一部族が「ガラタイ = Γαλαται」と呼ばれたことからきているものと思われます。英語では、GalliがなまってGaulになり、その言語はGaelic「ゲール語」と呼ばれています。ヨーロッパのケルト人は消滅し、今現在ケルト系として存在するのは、アイルランド(Ireland)、

スコットランド(Scotland)、イギリスのウェールズ(Wales)地方、そしてフランスのブルターニュ半島「Bretagne (仏)、Brittany (英)」にいる人々です。フランスにはケルト人がいたので、フランスの地はガリとよばれましたが、ローマが滅びると、今度はゲルマン民族が侵入しフランク王国を作りました。今日のフランスという名前はここからきています。古フランス語では、Francで「フランク人の国」の意味です。フランスでもケルト、ローマ、ゲルマンがミックスしていますので、基本的には、フランスもイギリスも一緒ですが、何事にも我が道を行くフランスには、より強いケルトの血が流れているような気がします。

ヨーロッパ大陸に古代ケルト語の資料は一切ありません。ケルト人は文字を持っていませんでした。イギリスでは、ゲルマン民族がケルト文化を一掃したので、一般名詞では残っているものはほぼありません。梅田 修の「英語語源辞典」では、bin「大きないれもの」、slogan「スローガン」、whiskey「ウイスキー」があげられています。sloganは「スコットランド高地人の緊急招集の叫び声」=army cryだったとのこと。whiskeyはスコットランドのスペルはwhiskyでeがおちています。地名として残っているものは、Thames、London、Dover、Kent などが 있습니다。Londonは、古名がLugdunumで、「(ケルトの光の神) ルーク神の城塞」の意味だそうです(「ケルト人ヴァンセスラス・クルータ 鶴岡真弓訳(白水社)1991年」から)。Thamesは古期英語ではTemes(e)です。この方が発音に忠実です。Te→Theになったのはフランス語の影響です。

ケルト人が歴史上に姿を現すのは紀元前5世紀で、ヨーロッパ大陸でケルト民族の勢力が衰退していくのが紀元前1世紀頃です。したがって、ケルト人の絶頂期というのは、おそらく紀元前4~3世紀頃と思われます。その頃は、ほぼヨーロッパ全土に渡ってケルト人がいたということになりますが、何度も言いますが、ヨーロッパ大陸の古代ケルト語の資料は一切ありません。また、ケルト民族の起源についてはインド・ヨーロッパ語族の西方の一派であるという説もありますが、今現在ハッキリしたことは不明です。おおきくみると、日本の縄文時代から弥生時代にかけてが、イギリスのケルト人の時代と同時代です。ケルト人はローマ人の侵略によりScotlandやWalesやIrelandに逃れたのですが、この点、日本の縄文人や弥生人にはそのようなことが起こっていません。これだけでも、縄文時代が平和であったといえるのではないのでしょうか。英語が子音中心の言語になっていることは、民族の平和度と関連しているような気がします。

古代ギリシャ人が作った「ケルトイ」という名前は、「野蛮人」の意味だったそうです。ギリシャ人は、アルプス以北の異民族を何であれ「ケルトイ(Keltoi)」と呼んだのだそうです。まあ、ギリシャ人もケルト人も、どちらも似たり寄ったりのところなのでしょうが、ギリシャ人は自分たちが文化的に優位にあると思ったから、そう呼んだのでしょう。古代中国でも同じようなことが起こっています。辺境の異民族を、野蛮人を意味する「夷狄(いてき)」という漢字で表したりしています。そのたぐいです。したがって、ケルト人という名前は、いろいろひっくるめて「野蛮人」と呼んだに等しいわけですので、個別の民族の呼称はそれぞれあったわけです。

ネットに北海道教育大の手塚先生が書かれた論文が上がっています。その論文の中で、手塚さんは、イギリスの少数言語として、アイルランド・ゲール語、スコットランド・ゲール語、そしてウェールズ語の三つをあげ、これらの言語が絶滅に瀕していると言っています。ウェールズ地方は、英国南西部の地域で、手塚先生によれば、ウェールズ語、ブルトン語、コーンウォール語があったとのこと。民族により、少しずつ言語が違っていったこととなります。

これらはすべてケルト系の言語です（英語語源辞典によれば、「ウェールズ(Wales)」は、古い英語（古期英語）では、「外国人」(foreigner)の意味）。「ブルトン」は古フランス語でBretonです。つまり、ゲルマン系の民族がイギリスに侵入する以前に、イギリス南部にケルト系のブルトン人がいて、ローマ人はそこをBrit(t)ānniaと呼び、今日のGreat Britain「大ブリテン島」という語はそこから生じていると考えられます。すでに述べたように、この民族は英国海峡を越えたフランスのブルターニュ半島にもいます。ブルターニュ(Bretagne)はBritanniaのフランス語です。古くは独立国でした。Little Britainの愛称も持っています。近藤和彦さんの「イギリス史10講（岩波新書）2013年」には、Brit(t)ānniaは特にイギリスのウェールズ(Wales)人をさす言葉であった、と書いてあります。

ケルト以前のイギリスは、あまりよくわかりませんが、例えば、定松 正・蛭川久康編著「風土記イギリス（新人物往来社）2009年」では、ケルト人の前に、地中海地方からイベリア人、中央ヨーロッパからビーカー人が侵入したと書いてあります。これらは青銅器時代の人々ですので、B.C.3000年ころです。最近、約1万年前にイギリスにいた狩猟民の人骨のDNAが解析されています。その人骨は、肌を暗褐色にする遺伝子を持っていたと報告されています（NHKの番組から）。おそらく中東あたりからの北上した狩猟民なのでは、と考えられます。要するに、ヨーロッパの氷河が溶け始めると（9000~8000年前）、南から諸民族が上がっていったわけです。

イギリスのケルト人は、ローマ人に350年ほど支配され、ローマ化されていきます。ローマが最初にブリタニアに侵攻したのは、紀元前でカエサル（シーザー）ですが、本格的にブリタニアの支配が始まったのは、紀元後43年です。クラウディウス帝の時代です。この間、ローマ文明により、街道や港などの公共設備が整えられ、ローマの属州としてラテン語が広められます。日常語にもラテン語が入った状態だったでしょう。つまり、諸民族の現地語とラテン語の共存です。支配は、北はスコットランドの近く、西南はウェールズのあたりまでで、イギリス全土ではありませんでした。この間、ローマ人とブリタニア人がミックスしたはず。人種的にはハイブリッドになっていったこととなります。

ローマ軍が409年に撤退すると、今度はゲルマン人が大々的に侵入してきます。団体戦に弱いケルト人は彼らに追いやられ、コーンウォール地方やアイルランドやスコットランドに逃れ、今日に至っています。アイルランドの公用語は、今現在でもゲール語(Gaelic)と英語になっています。例えば、ケルト系のゲール語ではアイルランドのことをÉireといいます。いい感じの語ではないですか。この名前は、古代アイルランドの女王の名前からきているとネットの説明にありますが、専門書では調べていません。アイルランド人の特徴といわれる演技や雄弁さなどは、もしかしてケルトの古代から受け継いでいる特徴かもしれません。

以上から、英語は、古代期にケルト系言語、ラテン語、ゲルマン系言語の三つがミックスしたハイブリッドであることが分かります。ケルト人は文字を持っていなかったわけですから、文字として英語に入ったのはまずラテン語で、それにゲルマン系のアングロ・サクソン民族の文字が入ったこととなります。アングロ・サクソン族の文字はルーン(Rune)文字と呼ばれます。この文字もギリシャ語をもとにしていますので、ギリシャ

を基にしたラテン文字とルーン文字がイギリスで出会ったこととなります。そしていくつかの変化を経てできあがった文字が、現在のアルファベット26文字です。

ケルト人、ローマ人、ゲルマン人がミックスし、灰神楽のようになったブリテン島がやがて落ち着き、七つの民族国家で出来上がったのは8世紀頃です。そして、これらの民族国家の共通語のように出来上がったのがÆngliscで、今日のEnglishの原形です。英語学では、これを古期英語(Old English=OE)と呼ばれています。

実は、日本語も東アジアのハイブリッドです。今日我々が話す日本語は、おそらく縄文時代、弥生時代、古墳時代に確立したのではないかと思います。現在では、考古分子生物学や分子人類学や先史考古学などで、古代人のDNA解析が行われ、古代の人間の交流が分ってきています。人間の交流は言語の交流でもあるので、人間の交流により言語のハイブリッド化が生じます。この分析によると、縄文人の遺伝子は、東アジア一般の遺伝子と異なることが判明しています。調査の結果、タイの山奥に暮らす、現在のタイ人とはまったく異なる系統の言語を話すマニ族という南アジアの少数民族（約30人ほど）の遺伝子に近いことが分かりました。金沢大学の覚張隆史教授（考古分子生物学）の学説では、このマニ族の先祖は、アフリカを出て南アジアに向かった最初のホモ・サピエンスのグループで、このグループが東南アジアから北上し日本列島に入ったものと考えられるそうです。その後、弥生時代には、北東アジアや東アジアの民族が入り、古墳時代にはさらに多方面から民族が日本列島に入ったと考えられています。おそらく、古墳時代は一種の多言語社会だったのではないかと覚張氏は言っています。要するに、ヨーロッパでもアジアでも昔から民族の交流というグローバル化が起こったわけです。覚張氏は、現代日本人のDNAの約60%は、縄文・弥生時代以降に日本に入ってきた第3グループからのものと主張しています。逆に言えば、現代日本人のDNAの約40%は縄文・弥生時代のものであるということになります。

視覚と聴覚

アルファベットは母音と子音を字母にしています。ヨーロッパの言語は、アルファベット言語です。おそらく例外はないでしょう。一般的にアルファベットの文字それぞれに意味はなく、文字が組み合わされると意味が生じます（とされています）。人類が文字を使い始めたのがいつなのか誰にも定かには分かりません。エジプトのヒエログリフ(hieroglyphic)、シュメール人のくさび形文字(cuneiform)、中国殷王朝の甲骨文字などが現段階では最古に属します。これらは、紀元前5000~3000年頃のものですが、人類はおそらくそれ以前から何らかの文字を使い始めているのではないのでしょうか。日本では縄文人はすでに述べたように、他民族との交流がない孤立状態で弥生時代まで暮らしていました。縄文時代の文字は発見されていません。しかし、土器は見つかっています。土器には抽象化した模様がついています。すでに美的な抽象能力を持っていたわけだから、何らかの文字（にちかいもの）も使っていた可能性は否定できません。

人類は話すことから始まり、やがて文字を書くようになった。このプロセスは間違いないでしょう。まず自然のなかのもの、おそらく獲物の動物などを線画として簡単に形を描くことから始まり、やがてその形をくずし、線で抽象化していくのが順序と考えられます。抽象化は概念化で、やはり絵文字だけでは何かと不便で応用がききません。話し言葉は所詮音ですから、その音だけを表すように簡略化を行った結果が表音文字でしょう。そして、あくまでオブジェの形にこだわったのが表意文字だと考えられます。表意文字の代表は漢字です。例えば、漢字の「馬」は、馬のたてがみと足の抽象化ですが、

全体から走る馬の力走感さえも感じられます。漢字は、このように物体に対する感覚さえも含むことができる利点があります。ただし、その分、数学的な応用はききません。

ところで、文字の発達の過程は、人間がいろいろ集まって工夫したというよりも、どこかの古代民族の中の頭脳の持ち主が、まず閃きとして文字を作ったと考えるのはどうでしょうか。そして、一旦何らかの文字がいくつかできあがれば、それをすぐに改良し追加し利用する人間が出てきたはずで、古代人がこの地上で生きていくとき、最も大切なことは、周りのあらゆるものの「動き」を知ることであったと想像します。「動き」とは、周りの変化のことです。この「動き」は聴覚でも視覚でもとらえられますが、視覚がカバーできる範囲は聴覚よりも狭いです。視覚では背後をカバーできないし、視覚には一定の範囲の光や、場合によっては暗さが必要となります。この点、聴覚は一定の範囲の周波数の音なら、すべて耳でとらえることができます。したがって、一般的には「聴覚>視覚」です。言語は、すでに述べたように聴覚が先行します。物体の「動き」は普通、音を伴います。その音を聞き取り、どんな動きなのかを脳が判断し、さらにそれに対しどのような行動をとればよいのかを決めます。これがサバイバルの基本となります。視覚は音を伴いません。ここに落とし穴があります。

聴覚について、ぜひ言っておきたいことがあります。今や世はSNSの時代ですが、「中央公論2024年4月号」に、ウクライナ戦争のコメンテーターとしてテレビによく出るロシアの専門家である小泉 悠(1982~)氏の対談が出ています。その一部に以下の発言があります。

『SNSには、会話がどんどんとんがっていく、独特のネガティブサイクルがありますよね。目の前で話していると感じの悪くない人が、Xの投稿では、恐ろしく刺々しいことがある。だからこそ生身の人間同士の対話が大事な、と。文字コミュニケーションに任せておくと、分断は深まる。』

スマホの液晶画面で文字だけの対話をする、言葉が攻撃的になる、という指摘です。これが原因で、世の中で多々問題が起こります。しかし、なぜそうなるのか誰も説明していません。SNSのコミュニケーションには、生身の対話では必ずある聴覚から入る音がありません(相手の顔の表情が見えないことも関係しますが)。つまり、相手が話す音としての言葉がないのです。ここに落とし穴があります。生身の対話には、相手の発する言葉の音があり、これが耳を通して入り、視覚からの情報と混ぜて脳内処理されます。相手の音には、相手の感情、心理、意図などの言語化されない情報が含まれています。うれしいときの声、悲しいときの声、悩んでいるときの声、怒りの声など、人の心理は発する言語のピッチ、リズムに現れ出ます。これをヒントに、脳は総合判断をします。SNS言語の脳内処理には、この重要な部分が欠けることとなります。SNS言語は、いわば文字と意味だけのロゴス処理でしかありません。SNSでの炎上は、この現代の情報社会の落とし穴を暴露する現象なのです。



アルファベットのS

少しハナシがずれてしまいました。さて、皆さん最近、電子辞書やスマホやiPadに入っている辞書を使います。それでも大きな問題はないのですが、紙の辞書には一つ英語という言語の特徴が見てすぐに分かる特徴があります。紙の辞書には辞書の‘spine’「背」の反対側、つまり‘endpaper’（見返し側）側に色がついた索引の部分があります。AからXYZまで、それぞれ幅があり、アルファベットのどの出だしの語が多く扱われているのかが、見ればすぐに分かるようになっています。英語では、Sの索引幅が一番大きくなっているのですが、みなさん気がついていましたでしょうか。多分、だれもそんなこと気にしたことがないかもしれませんね。英語は、[s]音が語頭に最もよく使われている言語なのです。

例えば、Genius第五版「（大修館）2014年（以下Genius）」には約10万語が入っています（第6版は106,000語）。「A」から‘XYZ’までページにして2453ページで、‘S’には278ページ割かれています。これは全体の約11%です。アルファベット26文字で全ページ数を割れば、各アルファベットのページ分担の平均は約94ページになります。したがって、‘S’のページはこの平均の約3倍になります。次に幅が大きいのが‘C’で228ページ、後はほぼ同じくらいの幅で‘A’、‘P’、‘T’があります。

40万語以上が入っているWebster’s Third International Dictionary1993（以下Webster）では、‘S’は329/2662ページで、約12.4%を占めています。おそらく、手元がないので確かめていませんが、1000年以上に渡って使用され、60万語以上をカバーするOxford English Dictionary(OED)ではもっと大きなパーセンテージになるのかもしれない。ページ数だけを見て、語数では確認していないので数学的正確さがない、と言われるかもしれません。

小西友七編集の「英語基本動詞辞典（研究社）1980年」という辞典があります。現代英語の中で基本動詞として扱われるものを388語集めて、その使い方を詳説しています。基本動詞ということは、日常生活で使われる基本動詞ということになるので、ラテン語系の動詞ではなく、英語本来のゲルマン系の動詞になるはずです。そして、筆者がこれまで述べたことが正しいとすれば、388の動詞の中で[s]で始まる動詞の数が一番多いはずです。

実際に語数を調べたところ、多い順に言えば、s(52)→c(32)→d(31)→r(30)→p(29)でした。ダントツに[S]の語が多いのです。約13%です。これがアングロ・サクソン民族の音感覚なのです。参考のため、上述の「英語語源辞典（研究社）1997年」からいくつか基本動詞を上げてみます。

have、do、make、come、give、go、run、become、gather、knock、know、tell、ask、hear、say、see、meet、look、find、think、buy、learn、let、like、love、live、work、hope、wish

中学校の英語の教科書に出てくる動詞です。スペルが短いのが特徴です。get、give、take、call、wantが入っていませんが、これらは北欧起源です（dieもこの可能性があります）。いずれにしても、これらの基本動詞は、一部の例外を除き（例えばturnやchange）ラテン語起源ではないということになります。ゲルマン系の英語の味を濃厚に残している動詞です。そして、これらの基本動詞と組み合わせられるin、on、away、off、for、to、by、outなどの前置詞や副詞も英語本来の語です。

母音と子音



管見ですが、おそらく「あ」をはじめとする母音は主に感覚系、子音は主に警告などの連絡系のコミュニケーションに使われ始めたのではないのでしょうか。動物の出す警告音は、人間にすれば子音に聞こえたはずで。子音は遠くまで達する音です。何か動くとき必ず音が生じます。自然界は音にあふれています。風の音、木々のそよぎ、川の流れ、降る雨の音、動物の声、鳥のさえずり、何か近づいてくる音、人間の走る音、ものが遠ざかる音など、数え切れないくらいです。これらの音を聞き分ける感覚は、人類は生れ持っています。これらの音がやがて言語化されることとなります。自然界の音は子音です。例えば風の音。空気が流れたり何かにぶつかったりする音です。ここにももちろん母音は入っていません。母音は人間が自然界の子音の音をまねるために作った音ではないのでしょうか。自然界はさまざまな形でできています。したがって、さまざまな音ができます。人間には音を出す器官がありますが、限られた範囲のもので。口腔、歯、舌、口蓋、喉などだけです。限られた発声器しかないわけです。それを使って多種にわたる自然の音をまねるので、そこに人間的簡略化がおこなわれます。そこで、小鳥の鳴き声は‘twitter’、野獣の鳴き声は‘roar’、オオカミの遠吠えは‘howl’になります。軽い音は[t]音、重い音は[r]音、遠くまで聞こえるように発する音は、できるだけ喉と口を一体の筒状にする[h]になるのです。

音韻論(phonology)の分野では、[e]、[a]、[o]を基本母音としています。[a]、[e]、[o]の順が分りやすいのですが、それぞれの音が作られる口の中の位置の関係で、[e]が前母音、[a]が中母音、[o]が後母音とされています。[i]は前舌音、[u]は後舌音である。この二つが基本母音として扱われなかったのは、この二つがもっぱら[e]とか[au]の二重母音(diphthong)でしか強勢が置かれなかったからとされています。二重母音は、日本人にはわかりにくい音です。二つの母音が切れ目なく発音され、1つと見なされるということなのですが、これが「アはア、イはイ」の日本語にとっては、つながりがとらえにくいのです。筆者は、[ai]という二重母音の発音が最も二重母音らしく発音されるのは、ラグビーの審判の英語だと思っています。英語を母国語とする発音がきれいな審判が発する“Crouch. Bind. Set.”の‘Bind’を聞いてみていただきたい。[ai]が二重母音だと分るはずで。英語は古期英語の時代から強勢アクセント(stress accent)ですが、それ以前には高低アクセント(pitch accent)の時代もあったようです。文法も発音も変わるのです。

さて、このようなさまざまな言語のアルファベットに共通するのは、出だしのAとBの音です。フェニキア、ヘブライ、ヨーロッパ諸語、さらにアラビア、ペルシャ語など、すべてアルファベットはA→Bの音の順になっているはずで。Aは日本語にすれば、「あ、ア、阿」音です。おそらく世界のすべての言語にとって最も大切な音は「あ」=Aなのではないかと思われ。だからアルファベットはAから始まるのではないのでしょうか。このことについて、東洋哲学の碩学、慶應義塾大の語学の天才、故井筒俊彦氏は「井筒俊彦著作集9 中央公論社（1992年）」の中で以下のように述べています。

『阿字が梵語アルファベットの第一文字であるということが、それ自体で既に絶対的始原性の象徴的表示ではあるが、そればかりではなく、「人が口を開いて叫ぶ時に、必ずそこに阿の音がある」と言われているように、アはすべての発音の始め、すべてのコトバの開始点、一切のコトバ的現象に内在する声の本体である。』

ほどよく口を開いて、息をハーッと吐き出すときの口の形をして音を出してみると、「あ」の音になります。最も口の力を抜いた自然の状態です。基本の音です。内科医が患者の喉の状態を調べるとき、患者に「アー」と声を出して下さい、と言って患者の喉を調べます。「あ」は、喉を最も解放させる音なのです。おそらく人類はまずこの音を大事にしたと思われます。旧約聖書に出てくるユダヤ民族の始祖「アブラハム」は、正にAとBの組合せです。‘Abraham’は、古代ヘブライ語 äbh+‘hamōn’で、‘father’+‘multitude’=「大勢の人の父」の意味です。日本語でも感動や詠嘆は「ああ」です。英語でも、‘ah’や‘aha’があります。「あ」がいかに大切な音なのか、「絶対的始原性」とは難解な言葉ですが、意味するところは感じることができます。

構造主義で有名なフランスの民族学者レヴィース＝トロース(Levi-Strauss 1908~2009)は、基本母音として[a]、[i]、[u]をあげ、母音三角形を作り、頂点に[a]をあげています。この[a]の音が最もエネルギーが集中する音だと言っています。おそらく、喉が最も解放される音なので、最も強い音となって波形が出てくるのかもしれない。いずれにせよ「ア」系の音がなければ、人類はずいぶん困ってしまいます。次にBがきます。これは、おそらくAからBの音への移行(Aの口からBの破裂音へ)が最も自然であるからなのでしょう。Bは有声両唇破裂音である。唇を閉じた状態から開けた状態に移行する時の音です。このとき、日本語なら「ば／ぱ」という音になります。

生まれてすぐに赤ちゃんが出す音、すなわち呱呱の声は「おぎゃあ」が普通ですが、赤ちゃんがだす音として「バブバブ」もあります。これは赤ちゃんが、機嫌がいいときに出す音とされている音です。「赤ちゃん」のフランス語は‘bébé’、スペイン語は‘bebé’、英語やドイツ語は‘baby’、ペルシャ語は‘ba’che’で、語頭はすべて[b]音です。これらはおそらく「バブバブ」と同じ赤ちゃんの発する声をまねたオノマトペであろうと考えます。赤ちゃんが出す音の中で最も目立つのが[b]音に聞こえる音だからでしょう。日本語では嬰兒を色でとらえ、「赤ちゃん／赤子／赤ん坊」という。この「赤」色が、生まれたままの赤ちゃんが赤みを帯びているからなのか、それとも「赤」には朝に登る太陽のイメージとして「無垢」や「始め」の意味があるからか、それとも梵語の「水」(ap)や仏前に供える浄水「アルガ(argha)「闍伽(あか)」からきているのか判然としません。少なくとも[a]音になっているということは、基本の音だと言うことではないでしょうか。

今回もハナシが長くなりました。今回はアルファベットを中心にしました。次回3回目は、最後に少し触れたオノマトペのハナシにしたいと思います。

最後に英語で一句

Autumn skies higher and deeper becoming,
Plumes of silver grass soft and cool waiving,
As if over to the Hades the aged beckoning.